

# 王と息子



「先に部下を遣わしたが、彼らは受け入れない。ある部下は殺された。民はどつしてもわたしの彼らに対する愛がわからないのだ。彼らのところに、息子であるお前に行ってもらわなければならぬ。行ってくれるだろうか。」王はおもむろに唇を開くと、そのように言った。

王子は答えた。「はい。おとうさんが望まれることならば。彼らを救うために私が出かける必要があるなら、参りましょう。」

「しかし、行っても、彼らはお前のことを歓迎はしないぞ。」と、王。

「でも、おとうさん。私が懸命に彼ら愛すれば・・・。」

「おまえのことだ。彼らを愛し、彼らのために寝食を忘れて仕えるだろう。彼らは喜ぼう。けれど、彼らはお前を利用するだけ利用すれば、さつさとお前のもとを去っていくのだ。彼らは病に犯されているからだ。自己中心という罪の病に。」

その呪わしい罪から彼らを救ってやらねばならない。」王は続けた。「実は、おまえの任務は、それどころではない。彼らはお前が正しく清すぎるといつて、お前を憎み、お前をつかまえて、お前に罪を着せる。そのときには、お前が最も愛した友までも、お前を捨てて逃げ出す。それでも行ってくれるか？」

「はい。それから・・・。」

「彼らは、お前を縛り上げ、目隠しをしてこぶしで殴りつけて、つばを吐きかけて、激しく鞭打つだろう。皮は破れ肉は裂けよう。それでもあえて彼らを救うために行ってくれるのか？」

「はい。それがその自己中心という恐るべき罪の病から、彼らを救うために必要ならば、まいります。」

「・・・最後には、彼らはお前を荒木の十字架につけるのだ。お前のその手とその足に、犬釘を打ち込んではりつけにする。彼らは、おまえを嘲るだろう。『救い主のくせに自分を救うこともできないのか。』と。それでも、おまえは、行ってくれるか。」

王子は答える。「はい。それをおとうさんが望まれるならば、・・・どんなに苦しい時で

も、お父さんがいつも一緒だから、ぼくは耐えられます。」

すると、王はかつと目をひらいて王子を見つめ、次に目を伏せて沈黙した。長い長い沈黙だった。夕闇が迫っている。王は叫んだ。

「しかし、おまえが一番苦しく、わたしを必要としている、その時、わたしは最愛のおまえを、永遠の呪いがつめ込まれた闇のなかに捨てなければならぬのだ！」

王子の顔は青ざめていた。「おとうさんに捨てられる。お父さんに・・・。」しかし、しばらく後、王子は静かに言った。「わたしが行くことが、そして辱めを受けることが、そして、十字架で殺されることが、そして、あなたにまで捨てられることが、彼らを救うための唯一の方法だと言われるならば、わたしはなんとしても行かねばなりません。」

王子は唇をひきしめて父の目をみつめた。慈愛に満ちた王の目からは、とめどなく涙があふれていた。

さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫ばれた。 マタイ福音書二十七・四五・四六